２０１２／１２／０９　　礼拝メッセージ　　成田宜庸　兄

主　　題：イエス・キリスト降誕の知らせ
聖書箇所：マタイの福音書　１章１８－２５節

１２月に入ると私の家の周りではイルミネーションを付ける家が何軒かあります。それを見て「あゝ１２月だな…、クリスマスの時が来たのだな…」と思います。その家庭が全部クリスチャンホームであったら本当にすばらしいと思うのですが、世の風潮で家の飾りにイルミネーションを付けているというのが殆どでしょう。ただ一つ良いことは、夜が明るいことです。私たちには足元がよく見えるので助かっています。今日はしっかりとイエスが来られたその知らせをみことばから学んでいきたいと思います。マタイの福音書１章１８－２５節をともに学びましょう。その箇所を読みます。
「1:18 イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。:19 夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。:20 彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。:21 マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」:22 このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。:23 「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。):24 ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、:25 そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。」

１．マタイ１：１－１７

今日の箇所の前に１－１７節がある訳です。１節の始まりはこのように書かれています。**「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。」**。皆さんご存じのように、このマタイの福音書はユダヤの人々に宛てて書かれた福音書であると言われています。ユダヤ人は系図、家系というものを非常に重んじる民族です。ここに書かれている系図の特徴はこうです。

◎この系図の特徴

（１）三つの１４世代という規則的な図式に歴史をまとめている。

そのことによって、準備の時は終わった、イエスにおいて約束の救い主のときが来たということを示しています。

（２）イエス・キリストはダビデ王家の正当の血統を引いたメシヤであり、ユダヤ民族の先祖であるアブラハムの子孫から出るメシヤであることを明らかにしている。

神はアブラハムにもまたダビデにもいろいろな約束をなさいました。そのことは旧約聖書の中に書かれています。アブラハムに対しては創世記２２：１５－１８**「それから【主】の使いは、再び天からアブラハムを呼んで、:16 仰せられた。「これは【主】の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、:17 わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」**という約束が与えられました。また、エレミヤ書２３：５には**「 見よ。その日が来る。――【主】の御告げ――その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行う。」**とあります。**「若枝」**とはダビデの子孫として生まれて来るイエス・キリストを指しています。アブラハム、ダビデに与えられた約束はイエス・キリストの誕生によって成就しました。ですから、この１８節の前に書かれている系図は、ただ単に系図が書かれているということでなくて、１８節以後に書かれているこの世に来られるイエスがどのようなお方であるかを明らかにしている、いわゆる序文なようなものです。１－１７節と１８－２５節を考えてみると、イエスが

公生涯に入られる前に、バブテスマのヨハネがイエスのために道備えをしましたが、まさに、そのような関係にある二つの箇所と言えます。１８－２５節をより詳しく教えるためにこの系図がその前に記されているということです。

<u>並行箇所</u>：ルカの福音書１：２６－３８

先程マタイ１：１８－２５を読みましたが、他の福音書にもイエスの誕生の告知のことが書かれています。それはルカの福音書１章２６－３８節です。**「:26 ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。:27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。:28 御使いは、入って来ると、マリヤに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」:29 しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。:30 すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。:31 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。:32 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」:34 そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」:35 御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。:36 ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。:37 神にとって不可能なことは一つもありません。」:38 マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。」**、ルカはこのように記しています。マタイと同じようにイエス誕生の知らせのことを書いていますが、違うところがあるのです。それはマタイは夫ヨセフへの告知です。夫への誕生の知らせです。しかし、ルカの方は妻マリヤへの告知です。どちらかと言うと、この時期に多く語られるのはこのルカの方です。マリヤへの誕生の告知の方が多く語られます。男性の皆さん、心配はいりません。夫にも告知されていますから…。今日はそのマタイの福音書の方をごいっしょに学んでいきたいと思います。

２．マタイ１：１８－２５

１：１８

マタイ１：１８の書き出しは**「イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、」**です。これは結婚をしたということではなく、マリヤとヨセフは婚約をしていたということです。婚約について、ユダヤでは婚約は法律上の夫婦と見なされます。その期間は約１年間と言われています。そして、婚約の期間が終わってから正式な結婚式が挙げられるのです。そして、ともに住んで生活をする訳です。ですから、もし、婚約期間中に離婚しようとするなら、正式な離婚の手続きが必要でした。この**「ヨセフの妻と決まっていた」**ということばはそういう意味です。

そして、次の**「ふたりがまだいっしょにならないうちに、」**とはまだ正式の結婚を挙げる前のことという意味です。だから、この期間にヨセフとマリヤの性的な関係はありませんでした。**「ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。」**、この箇所をルカの福音書ではこのように記しています。ルカ１：３４－３５**「そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。:35 御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。」**と。とても格調が高いと言えます。マタイの方は事実だけを記しているような書き方になっていますが内容は同じです。**「身重になったことがわかった。」**、マリヤが妊娠しているということです。それは **「聖霊によって」**と書かれています。皆さんご存じのように「処女降誕」のことです。

◎処女降誕

「処女降誕」はイエスの生涯の中で「十字架」、「復活」とともに非常に大きな出来事です。ヨハネはヨハネの福音書１：１４の初めに**「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」**と記しています。また、パウロはガラテヤ人への手紙４：４で**「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、こ**

の方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。」と言っています。イエス・キリストは「処女降誕」という状況でお生まれになりました。

（１）処女降誕の定義

この「処女降誕」は生物学的には絶対にあり得ないことです。でも、みことばはそれによってイエスが生まれたと私たちに教えています。「処女降誕」の定義は「イエス・キリストが神の摂理により、人の姿をとってこの世に来られるに当たって取られた方法についての特別の用語である。イエスは人間の父をもっておらず、聖霊の働きによって受胎した。こうして、神の御子イエス・キリストが神性をいかなる意味においても損なうことなく、完全な人間（罪のまったくない）として生まれた。」です。他にこのことばを使う方はだれもおりません、イエス・キリストだけに使われる用語です。ですから、御子イエス・キリストには人間の父はおりません。私たちと違います。私たちは人間の父と母を持っていますが、イエス・キリストには父はおりません。それは聖霊の働きによって受胎したということです。そして、このことによってイエス・キリストの神性はいかなる意味においても損なわれることなく、完全な人間として生まれた、罪のない人間としてお生まれになったということです。

そのことはピリピ人への手紙２章６－８節に書かれています。**「:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」**

（２）処女降誕の証拠

聖書がそのことをはっきりと教えているということです。今、マタイの福音書とルカの福音書を読みました。この二つの箇所で「処女降誕」が事実であることを明白に教えています。

（３） 処女降誕の重要性

ａ．私たちの「救い」が超自然的なものであることを思い起こさせる

私たちが新しく生まれ変わったという「新生」は聖霊のわざによるものです。聖霊のみわざによって私たちは新しく生まれました。ヨハネ３：３－６を参照してください。**「:3 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」:4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができましょうか。」:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。同じように、この処女降誕も聖霊の働きによって為されました。」**。同じように、処女降誕も聖霊の働きによって成されました。

ｂ．「救い」が全く神の恵みであることを思い起こさせる

イエスの母となったマリヤは特別な存在の女性ではありませんでした。マリヤは神の恵みによってイエスの母になる、そのように選ばれたのです。私たちの救いもまさに神の選びによることは皆さんよくご存じのことです。だから、この教理は「処女降誕は神の恵みである。」ということです。それによってマリヤがその役目を果たしたということです。

ｃ．この教理はイエス・キリストの無罪性を証明している

イエス・キリストは特別な方法で世に来られたただ一人の特異な人であることを示しています。それは全く罪のない方であるということです。ヨハネはヨハネの福音書１：２９で、バプテスマのヨハネがイエスを指して**「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」**と言ったと記しています。また、パウロはⅡコリント５：２１に**「神は、罪を知らない方を、…」**と書いています。また、ヘブル人への手紙の著者は４：１５に**「…罪は犯されませんでしたが、…」**と記しています。このように、この処女降誕はイエス・キリストが全く罪のない方であることを示しています。

ｄ．この教理は神の力と主権の証拠である

・**<u>創世記１８：１４</u>**：**「【主】に不可能なことがあろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子ができている。」**、アブラハムとサラの間にイサクが与えら

れました。そのときの二人の年齢は皆さんよくご存じです。百歳近い二人でした。これは神の主権と力によって成されたことです。先程も言いましたが「処女降誕」は生物学的には絶対に不可能なことです。しかし、神はお出来になったのです。

・**ヨハネ１：１３**：また、私たちの「新生」ということを見ても全く不可能なことです。でも、それを神は成し遂げられました。それは神の主権と力によってです。まさにそういうことをこの「処女降誕」は私たちに教えるのです。ヨハネはヨハネの福音書１：１３で**「この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」**と記しています。

・**マタイ１９：２６**：マタイは**「イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」**と、このように神の力を私たちに教えています。

あの著名なＪ・Ｉ・パッカーは自分の書いた本の中で「処女降誕」についてこのように言及しています。「イエスは超自然的に、すなわち、復活と昇天によってこの世を去った。従って、超自然的な方法でこの世に誕生することは全くもって適切なことである。神は処女降誕という方法以外ではこの世に来ることができなかったと断定することはできませんが、奇跡的な誕生は事実イエスの神性の証拠となり、また、私たちの新生において働く創造的な力の現実性をも示している。」と。処女降誕はこのような深い意味をもった教理です。１８節の後半**「聖霊によって身重になったことがわかった。」**。

１：１９

「夫のヨセフは…内密に去らせようと決めた。」とあります。この「去らせる」ということばは離婚を意味します。この箇所の欄外の《注》を見ると「離縁しよう」と書かれています。ヨセフは妻マリヤを離縁しようと決心したのです。ヨセフが決心した理由がその間に書かれています。**「正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、」**と、二つの理由が書かれています。

（１） **ヨセフは正しい人であった**：
それは敬虔なユダヤ人であったということです。もっと具体的に言うなら、神の御前に正しく、主のおきてと定めを守っていた人であったということです。同じようなことがルカの福音書ではバプテスマのヨハネの父であり母であるザカリヤとエリザベツのその人柄についても書かれていますし、同じくルカの福音書のその後に出て来るシメオンという人物にも、ヨセフと同じように「正しい人であった」という説明がなされています。主の戒めとおきてを守っていたそのような人物であったということです。

（２）**彼女をさらし者にしたくなかった**：これがもう一つの理由です。「さらし者にする」、さらされた者は人の前で恥をかかされます。中傷されます。だから、ヨセフはマリヤをそのような者にはしたくなかったのです。

ヨセフの決心の理由はこの二つに依ります。

◎ヨセフの二つの選択

ヨセフにはこのとき二つの選択をすることが可能でした。

（１） **旧約の律法に従った方法**：
律法では姦淫の罪は死刑です。石打ちの刑です。そのことは申命記の２２章２２－２４節に書かれています。**「:22 夫のある女と寝ている男が見つかった場合は、その女と寝ていた男もその女も、ふたりとも死ななければならない。あなたはイスラエルのうちから悪を除き去りなさい。:23 ある人と婚約中の処女の女がおり、他の男が町で彼女を見かけて、これといっしょに寝た場合は、:24 あなたがたは、そのふたりをその町の門のところに連れ出し、石で彼らを打たなければならない。彼らは死ななければならない。これはその女が町の中におりながら叫ばなかったからであり、その男は隣人の妻をはずかしめたからである。あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。」**。姦淫をした者は石打ちの刑で殺されたとあります。ということは、これは彼女をさらし者にすることです。

（２） **当時の離婚法によって公にしないで離婚する**：
しかし、ヨセフは当時の離婚の法律に従って公にしないで離縁することを選びました。ヨセフはこちらの方法を取りました。だから、**「内密に去らせようと決めた。」**とみことばは教えるのです。

１：２０

「彼がこのことを思い巡らしていたとき、」とは離縁しようということです。そのことを決心してそのように思っている時に神の介入がありました。この２０節は、原文では「主の使い」ということばの前に「見よ、そら」という意味のギリシャ語が書かれています。日本語の聖書には書かれていませんが、これから語られることばに注意を払うようにとこの小さいことばが書かれているのです。だから、これから主の使いがヨセフに語るそのことばに注意しなさいということです。現われた御使いはヨセフにこのように言いました。**「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。」**、**「ダビデの子ヨセフ」**、これはまさに家系の通りです。ダビデの血筋を引くヨセフということです。そして**「恐れないで」**とあります。これは不貞を犯して身重になったマリヤを迎えることは、周りの者がそれを見てヨセフを非難し、また、中傷するからです。不貞を犯した者は先程見たように旧約の律法では死刑です。そのような者を自分のところに迎え入れるヨセフに対して、周りの者は大きな非難を浴びせるかもしれません。しかし、みことばは**「恐れないで…迎えなさい」**とあり、その後に理由が書かれています。**「その胎に宿っているものは聖霊による」**と聖霊による処女降誕です。だから、イエス・キリストはマリヤの不貞によって生まれる子どもではなく、聖霊の働きによってこの世に来られる方であるということを御使いはヨセフに教えるのです。

宗教改革を成したルターはこのことをその書物の中でこのように言っています。「神の御子イエス・キリストが未婚の一処女からではなく、夫ヨセフのまぎれもない妻となったマリヤから生まれたことは、結婚ということに栄誉を帰することである。主キリストはその誕生によって結婚を尊ばれた。」と。**「恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。」**と御使いはヨセフに告げました。

１：２１

そして、２１節**「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。」**とあります。ということは、ヨセフには子どもの名前を付ける選択権がなかったのです。御使いは生まれる子どもの名前をヨセフに告げたのですから、父となるヨセフにはその権利なかったということです。**「この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」**と続きます。日本語の聖書には書かれていませんが、原文では**「この方こそ」**の前に「なぜなら」という前置詞が置かれています。「その名をイエスとつけなさい。なぜなら、この方だけが、この方ただ一人がご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」と、このように御使いはヨセフに言うのです。**「ご自分の民」**とはもちろんその当時のユダヤの人々を指していることは明白ですが、広い意味で言うならば「神の選びの中にあるすべての人」を含みます。いわゆる、クリスチャンとなるべき人をすべて含むのです。

「ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」、この当時、ユダヤはローマの植民地でしたから、人々はローマの圧政に苦しんでいました。人々はその圧政から救われることを願っていたから、実際的な現実的な王が現われることを望んでいたのです。その王が自分たちをローマの圧政から救ってくれることを人々は望んでいたのです。しかし、イエス・キリストが来られたのはそのためではなく、みことばが教えるように「民をその罪から救うため」です。

私たちが生まれながらにもっているその罪を贖なうためにイエス・キリストは来られるということを御使いはヨセフに教えるのです。「罪」とは皆さんよくご存じのように「的外れ」という意味です。的を得ていないことで、それは具体的には神に敵対するすべての思い、あるいは、行為を指します。それが罪です。

１：２２－２３

「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。」と、これまで書かれていたこの処女降誕に関するすべてのことは、預言者を通して言われていたことが成就するためであったとみことばは教えます。**「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）**。これはイザヤ書７章１４節の引用です。**「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そ**

して男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」、**「インマヌエル」**とは「神は私たちとともにおられるという意味である」とあります。「インマ」＝「とともに」、「ヌ」＝「私たち」、「エル」＝「神」です。「神は私たちとともにおられる」です。

旧約聖書を見ると、ヨシュアに対してもモーセに対しても、また、ヤコブに対してもヨセフに対しても「神はともにいてくださる」と書かれている箇所があることは皆さんはよくご存じでしょう。旧約聖書には至るところでそのことが記されています。

◎「インマヌエルなる方」の意味

（１）神の遍在性

神には限界がありません。あらゆる所に至る所に臨在されます。それがこのインマヌエルを現わしています。

（２）マタイの福音者は「インマヌエル」で始まり、「インマヌエル」で終わる

２８：２０にはこのように書かれています。**「また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」**、まさに、このマタイの福音書は１章の「インマヌエル」で始まって、２８章の「インマヌエル」で終わるということです。

（３） 十字架上でのことば

イエスが十字架上でいっしょに十字架に掛けられていた罪人の一人に語ったことばはどうでしょう？ルカ２３：４３**「イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」**とこのようにお語りになりました。

（４） もう一人の助け主

そして、イエスはこの地上を去る前に弟子たちにこのような約束をなさいました。ヨハネ１４：１６－１７**「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」**、**「その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」**と、まさに、インマヌエルなる方です。

（５）聖霊の宮

このことをパウロはＩコリント６：１９でこのように言っています。**「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」**と。私たちのうちには御霊がお住みです。インマヌエル、神は私たちとともにおられるということです。

１：２４－２５

「ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、:25 そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。」、**「命じられたとおりにして」**とは主の命令に従ったということです。また、**「イエスとつけた」**とあります。ヨセフは生まれて来る子どもを自分の家族の一員として迎えたのです。それは２１節で**「イエスとつけなさい」**と言われたことへの従順の現われです。私たちはこの２４節と２５節を見て「ヨセフの従順」を知ることができます。神の命令に従うことです。また、この従順は私たちクリスチャンの最大の特徴です。救われた者の最大の特徴です。パウロはこのことをローマ人への手紙１４：８でこのように言っています。**「もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」**と。パウロは私たちに従順に関してこのように勧めるのです。また、ペテロはＩペテロ１：１４で**「従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、従順な子どもとなり、」**と教えています。私たちは何年間もかけて近藤先生からローマ人への手紙の講解説教を聞いて来ました。６章には「従順の奴隷」ということばが出て来ます。６：１６**「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、**

あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。」。私たちクリスチャンがまず最初に現わさなければならない特徴はこの「主に対する従順」です。

そして、この従順の最高の模範はイエス・キリストです。イエスがこの従順の最高の模範です。皆さんご存じのように、ヨハネの福音書の１３章ではイエスが弟子たちの足を洗われたことが書かれています。そこでイエスは弟子たちに**「それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。」**（１３：１４）と教えています。神なる方が弟子の足を洗った、これは従順以外のどのようなことばを私たちは選べばいいのでしょうか？

結論

今日はマタイの福音書１章から「イエス・キリストの誕生の知らせ」ということで、みことばをともに学んで来ました。そこで、今日学んだところから次の二つの結論を挙げることができます。

（１） 処女降誕は事実である

それは聖書がそのことを明らかにしています。また、このわざを成したのは聖霊の働きによるということです。

（２） ヨセフの従順は神のご計画を実現させる従順であった

どうですか？皆さん。私たちも主に従順であろうと願いませんか？また、立てられたリーダーたちに従順であろうと思いませんか？なぜなら、神がそのことを一番喜ばれるからです。皆さん、少し考えてみてください。私たちの不従順が神の計画を阻害していることはないでしょうか？このクリスマスの時、私たちはもう一度、自分自身の信仰生活のあり方を自分で見つめるときとしたいものです。